

街道 SOUND —ほいほい、シャクシャク、りんりんりん

2024 2.7(水) ▶ 5.12(日)

貨幣・浮世絵ミュージアム
MONEY & UKIYO-E MUSEUM

江戸の旅路は楽しい音色であふれている♪

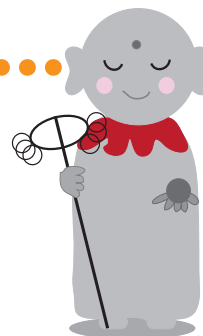
色々な音で満ちている私たちの世界。なかでも旅先で出会う音色は、新鮮さや癒し、高揚感など、私たちの心を深く揺さぶります。

本展では歌川広重の絵画世界から、江戸時代の旅路を彩る音を^{すく}掬いあげて紹介します。街道を往く^{くもすけ}雲助や大名行列の^{ばれい}掛け声、^{しゃくじょう}馬鈴や僧が持つ^{ごぜ}錫杖の清らかな音、瞽女の爪弾く物悲しい三味線の音、土地特有の言葉や唄など、江戸時代にも旅路ならではの音が響いていました。旅路に流れる音に耳を澄ます時、私たちは時空を超えた未知の体験に導かれることでしょう。

旅を豊かに彩り、日本人の記憶の奥深くに刻まれる音集めの旅へ——。

見どころ

- 江戸時代、街道にはどのようなSOUNDが響いていたのかを掘り下げる！
- 瞽女が奏でる三味線のSOUNDとは？ 三味線を徹底図解！
- つい口づさみたくなる懐かしの民謡の数々も紹介！！



寄れ一、寄れ一！ 大名行列のお通りだ！

参勤交代などで街道を往く大名行列といえば、時代劇で見かける掛け声が思い出されます。徳川御三家や御三卿は「下に、下に」、その他の大名は「寄れ」や「脇へ寄れ」などと発して往来の人に知らせました。

本図は海を一望できる大磯宿周辺の街道を描く。遠方の山々は伊豆半島であろう。毛鎗持を先頭に、大名行列の一部である弓組と鉄砲組が歩いてゆく。全員、旅行用の打裂羽織を着用し、刀の柄袋もお揃いである。江戸や国許、主要な宿駅では整然と隊列を組んだが、本図のように街道途中では間が空くこともあった。



行書東海道
東海道五十三次之内 大磯

チントンシャン ごぜ 瞽女の弾き語り



雨の日も風の日も山道を越えて各地を巡り、三味線を弾きながら唄い歩く盲目の女旅芸人・瞽女。三味線を背負い、3人ないし数人一組で家々を廻り、民謡や俗曲のほか、当時の流行唄はやりうたを聞かせて人々を楽しませました。生きるために唄う瞽女の声は、切ないほどに美しく響きます。

海上一里半(約6Km)の「今切の渡し」を越えると、新居の関所が旅人を待ち受ける。本図は広重が風景、三代歌川豊国が人物を描いた合作。杖を頼りに歩く瞽女3人の表情は明るい。瞽女は物乞いとは違い、関所の通過や宿の確保も容易で、娯楽に乏しい山村では大いに歓迎された。

雙筆五十三次 舞坂 今切海上風景

シャクシャク しゃくじょう 錫杖は清めの音色



街道を往く修行僧が、右手に持つ錫杖。杖の頭部に金属製の輪が付けられたこの仏具は、振れば「シャクシャク」と響くその音色で獣や毒蛇を遠ざけるとともに、煩惱を取り除き智慧を得られる「浄化の力」があるそうです。



沼津宿を通る東海道は、黄瀬川きせがわが合流した狩野川かのがわに沿って宿場に至り、次の宿場にある原方面へ駿河湾沿岸を抜けていく。

本図は、富士が大きく見えることから宿場の西側であろう。画面中央に榜示杭ぼうじくと宿泊の大名を記した関札せきふだが見え、ここが宿場の出入口と分かる。杭の近くには六部の姿があり、宿場の賑わいや駕籠昇かこがきの声とともに錫杖の音色が響いているのだろう。

葛吉東海道
東海道 十三 五十三次之内 沼津
足がら山 不二のすそ

りんりんりん ばれい 馬鈴は旅路の音

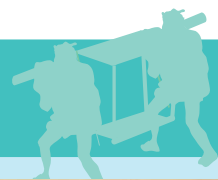


街道を行き来する旅人が乗る馬には、通行の安全や厄除けのために「馬鈴(馬の鈴)」が付けられていました。馬の腰から尻に掛ける紐しりがい(尻繫)に吊るされ、その数は一つから十数個まであり、形も様々でした。馬が歩く度に「チャグ、チャグ」「りんりん」など旅情あふれる音色でリズムを刻みました。

府中宿の西には安倍川、その近くには幕府公認の遊廓にちょうまち・二丁町があった。本図は宵時に賑わう遊廓の大門前で、提灯を持つ女性と馬上の遊客が言葉を交わしている。廓は府中宿からやや距離があり、男たちは馬や駕籠で出かけたという。柳の葉音や男女の囁き声、馬鈴の音、遊廓の奥から三味線の音まで聞こえてくるようである。

人物東海道
五十三次 府中

ほい、ほい くもすけ ゆ 雲助が往くぞ！



宿場間を往来する主な駕籠は、辻駕籠と呼ばれた簡素なつくり。雲助（駕籠舁）が「ほい、ほい」と掛け声を出して調子を合わせることから、「ほい駕籠」とも呼ばれました。また、箱根の山道を往く雲助は「ヘッチョイ、ヘッチョイ」と掛け声を出したとか。



大磯は、相模湾を望める景勝地。

本図は海沿いの街道を進む駕籠舁と女性を描く。女性が乗る「山駕籠」は竹で編んだ円形の底に網代の屋根が付いた簡易な造りで、主に山道の往来に使われた。駕籠舁たちは、息杖(休憩時に荷物支えや、体のバランスをとるために使用)を片手に持ち、力を合わせている。

人物東海道
五十三次 大磯

お国はどちらで？ なま うた お国訛りと土地の唄



旅先では、様々な土地の話し言葉に触れる機会があります。お国訛りの郷土色豊かで優しい響きは、旅の気分を盛り上げてくれます。また、馬子唄や船頭唄、伊勢音頭などは、その土地の暮らしや特色が反映されており、覚えた一節は最高のお土産になりました。

岩淵村は、吉原と蒲原の間に位置する間宿。

本図は岩淵村側から、富士川の舟渡しの様子と富士山を望む。この辺りは名物「栗の粉餅」を売る茶店が立ち並び、活気があった。裏漉した栗をまぶした餅で、英国の外交官アーネスト・サトウも食べたという。茶店や船頭たちから駿河の言葉が聞こえてくるようである。

縦絵東海道

五十三次名所図会 十六 蒲原 岩淵の岡より不二河眺望

次回予告

GOOD JOB! — 旅路の仕事人 2024 5.15 (水) ▶ 8.10 (土)

笑うことや悲しむこと、食べることに恋すること。人生はいろいろと忙しい。なかでも自己の成長や生き方に直結する「仕事」は人生における一大テーマです。街道の整備によって物流や旅の往来も活発化した江戸時代、そこで活躍したのは街道筋に生きる仕事人たちでした。飛脚や川越人足、関所役人、按摩など、より良い暮らしのために互いを信じて助け合い、逞しく生きる姿には、現代人の疲れた心を解放できるヒントがいっぱいです。迸る生命力、弾ける玉汗！旅路の仕事人、今夏必見！



貨幣・浮世絵ミュージアム
MONEY & UKIYO-E MUSEUM

【お問合先】052-300-8686 担当:鏡味・那須

ご案内

- 開館時間 | 9:00~16:00 (入館は15:30まで)
- 休館日 | 祝日(2/11・23、3/20、4/29、5/3-5)
- 入館料 | 無料 (団体見学の方は事前にご連絡ください)

〒460-8660 名古屋市中区錦3-21-24 三菱UFJ銀行名古屋ビル1階
052-300-8686 <https://www.bk.mufg.jp>



信仰者の音

江戸時代の旅路や旅先には、信仰者の姿が多く見られました。信仰者の鳴らす錫杖、尺八、法螺貝、鈴など法具の音や、唱えた言霊の独特な響きは、邪を祓い浄化の力を持つとされました。これらの音は人々の祈りを乗せて天と地を繋ぐものとされ、江戸時代の街道にはあふれていたのでしょう。



しゃくじょう 錫杖

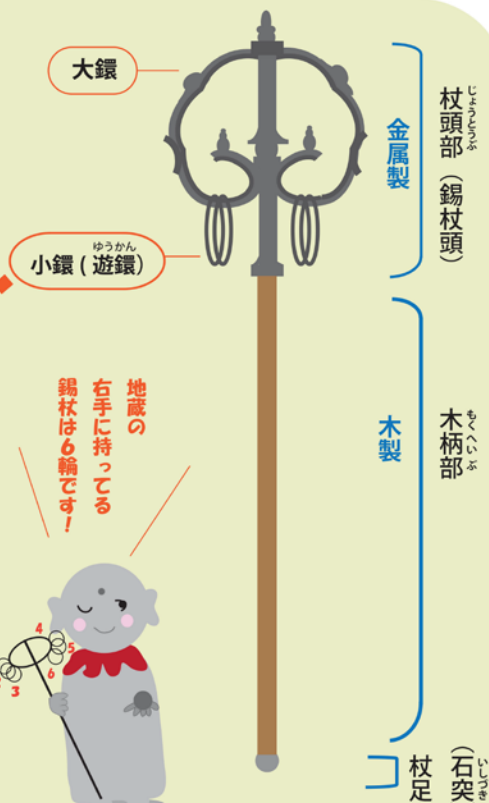
修行僧や修験者が持つ杖で、先端に金属の輪が付く法具。地面を突いたり振ったりすると響く音色は、毒虫や猛獣、蛇などを遠ざけて無用な殺生を避けられるとともに、あらゆるものを清めるとされた。30cm程(手錫杖)から人の背丈を越えるものまで様々な長さがある。浄手とされる右手に常に持つ。

4つ、6つ、12のものの3種類がある。

四環・・・声聞(仏の教え)を聞く錫杖
四諦(仏教が説く基本的な教えで、苦諦・集諦・滅諦・道諦のこと)を表す。

六環・・・菩薩の錫杖
六波羅蜜(仏の境地に至るための六つの修行)や六道(輪廻転生する六つの世界: 地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道)を表す。

十二環・・・縁覚(仏教の聖者)の錫杖
十二因縁(苦悩を断つための十二の事柄)を表す。



地藏の
右手に持ってる
錫杖は6輪です!



錫杖は修験者の持ち物。
悟りを得た如来は
持たないよ!

錫杖経
錫杖経は「錫杖の音色は、煩惱から解放されたいという気持ちを起させ悟りへ導く」という内容のお経。
抜粋
受苦衆生、聞錫杖聲、速得解脱
(苦を受ける者みな、錫杖の音を聞けば速やかに悟りを得られる)



ごえいか 御詠歌

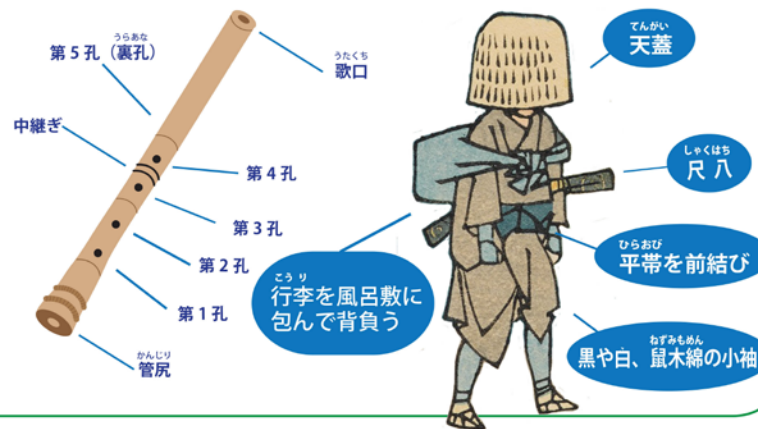
霊場をめぐる巡礼者が札所に参詣したときに詠唱する、仏の徳などを讃えた歌。鈴を振りながら、哀調を帯びた節まわしで三十一文字(五・七・五・七・七)の和歌を詠唱することで極楽往生できるとされた。

西国三十三所巡礼歌の一例

第8番 長谷寺(奈良県桜井市)
いくたびも 参る心は 初瀬寺 山も誓いも 深き谷川
第13番 石山寺(滋賀県大津市)
後の世を 願う心は かるくとも ほとけの誓い おもき石山

しゃくはち 尺八

竹の根元近くを用いて作った縦笛。指孔5つ、長さ1尺8寸(約54.5cm)が標準。虚無僧(禅宗の一派である普化宗の僧)は尺八を吹くことで悟りを得るとし、天蓋(深網笠)を被り尺八を吹きながら各地を廻り托鉢を受けて生活した。なお、普化宗は武家以外の入宗は認められず、僧ではあるが有髪であった。



こより
行李を風呂敷に
包んで背負う

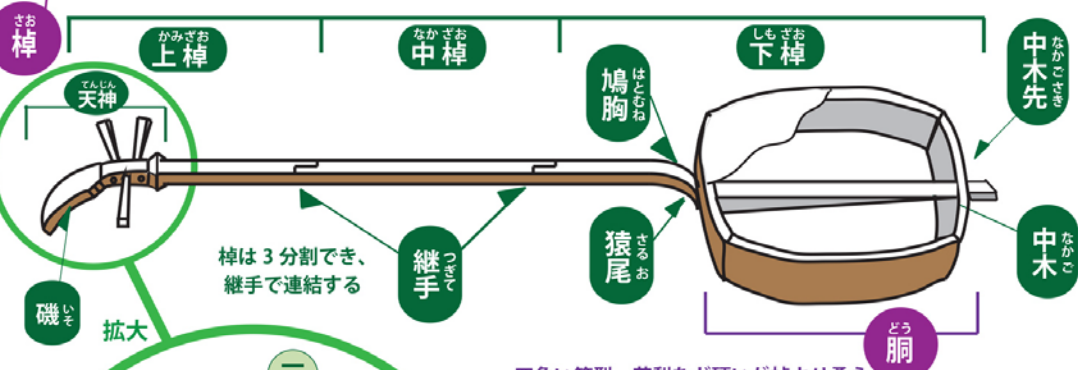
三味線の音

三味線は、中国の三弦を源流として、琉球（沖縄）の蛇皮線（三線）が永禄年間（1558-69）頃に大坂に伝わり、改良されたものと言われています。琵琶法師らが蛇皮を猫皮や犬皮に変えて、撥を用いるなどのアレンジをして生まれた三味線は、「江戸の音」の代名詞です。

紅木が高級とされ、次に紫檀、花梨、檜、樺など、硬くて高密度な木材を使用。硬質の方が音に透明感があり、余韻が豊かになる。

演奏の性格に合わせて棹の太さが異なる。

- 細棹** 高く軽妙な音色
長明、河東節、端唄（流行唄）、小唄など
- 中棹** 落ち着いた艶やかな音色
常磐津節、清元節、新内節、地歌など
- 太棹** 力強く迫力のある音色
義太夫節、津軽三味線



四角い箱型。花梨など硬いが棹より柔らかい木材を用いる。4枚の木材を枠状に張り合わせ、両面に猫や犬の皮を張る。現代では合皮のものもある。



けん 絃
絹糸を撚り合わせ、糊で固めたもの。左から一の糸、二の糸、三の糸と呼ぶ。各絃の末端は「音緒」でまとめ、中木先に固定する。

ばち 撥
形や大きさ、材質は流派や曲種により異なる。象牙が最上。地歌は水牛角、長唄は象牙、義太夫は両方を用いる。



月岡芳年《風俗三十二相 たのしんであさう 嘉永年間師匠之風俗》明治21年 国立国会図書館蔵

奏法
基本は左手の指先（人差し指、中指、薬指）を用いて棹上の「勘所（ポジション）」で絃を押さえ、右手の撥で絃を弾く。室内の狭い空間で演奏する小唄では、撥を用いず「爪弾き」として右手の指先で弾く。

調絃
調絃（チューニング）は「調子」と呼ぶ。各絃は音の高さを西洋の楽器のように固定せず、声の高さや曲の種類に合わせて変更できる。主に下記の3種類を用いる。

本調子	二上り	三下り
本格的・男性的	陽気・田舎風	粋・華やか・女性的
左から一の糸、二の糸、三の糸	本調子より二の糸が一音高い	本調子より三の糸が一音低い

江戸のブランド三味線

名工・石村近江の作ったものが最高で、蒔絵などの装飾も施されていた。代々続く名工だが、中でも初期のものは「古近江」と呼ばれて珍重された。五代目以降から棹の下部と胴に「近江」の焼印が入れている。

古近江で 岡崎を弾く お姫様 ——『俳風柳多留』より
(名器である古近江で、初心者の習う「岡崎」をお姫様が弾いているよ)



盲人と音楽

詩歌管弦に優れた盲人の男性は「当道座」、女性は「替女座」という互助組織があった。江戸時代では「当道座」は神社奉行の管理下にあり、音曲のほか鍼・灸・按摩や金貸業も認可されていた。

当道座の官位

無官 → 座頭 → 勾当 → 別当 → 検校 → 職検校



民謡とは

「民謡」という言葉は明治に入ってから使われ、それまでは俗謡、俚謡などと呼ばれていた。現在唄われる曲の中には、近代に入り地域宣伝のために北原白秋、野口雨情らによって創作された新民謡も多い。

静岡の「ちゃっさり節」、東京の「東京音頭」や山梨の「武田節」などは近代に作られた曲なの

同じ民謡でも、歌詞は地域によって微妙に違っているよ

京ことば

都があった京では、方言ではなく標準語として意識されていた。御所で話された公家言葉（御言葉）と、町中で話された町言葉に分類される。

例：おひや、お豆さん
(頭に「お」、最後に「さん」をつける)

大阪弁

商人たちが使った「船場言葉」が土台。公家言葉の影響も受ける。母音を引き延ばす。語尾に「～はる」とつく。

例：姉→いとさん
妹→こいさん
ごめんなさい→かんにん

おてもやん

「熊本音頭」として江戸時代末期から伝わり、花柳界で唄われた座敷唄。熊本弁の陽気な歌詞が特徴。

「おてもやん あんたこの頃嫁入りしてはでないかいな嫁入りしたこつアしたばってん

詞型 七七七調（近世小唄調）が9割
音階 およそ4種類
民謡音階（ドミファソシド）：八木節
都節音階（ドレファソラド）：黒田節
律音階（ドレファソラド）：君が代
琉球音階（ドミファソシド）：島唄

北海道 江差追分
信州の追分宿付近の馬子唄が、江差にも広がったといわれる。
「鶉のなく音にふと目をさましあれが蝦夷地の山かいな」

新潟県 新保広大寺節
元は神楽唄で日本民謡のレーツとされる。土地争いの一に加担した広大寺の和尚への悪口になっている。
「新保広大寺がめくりこいて負けた袈裟も衣もみなさえ取られた」

秋田県 秋田音頭
寛文3年(1663)、藩主の所望で柔術の型を舞踏化して子女に習わせた。地口という語呂合わせの歌詞で、秋田名物を唄う。
「秋田名物 八森騎 男鹿で男鹿ぶりこ 能代春慶 松山納豆 大館曲わっぱ」

山形県 花笠踊
祝詞として全国的に古くから有名な一節が冒頭にある。大正期、工事の土曜日に船方節などを取り入れて完成。
「目出度々々々の若松様よ 枝も(チオイチオイ) 栄えて 葉も茂る (ハア ヤッショーマカシヨ)」

群馬県 郡上節
「郡上踊」「郡上音頭」ともいう盆踊唄。代々の藩主が民心融和のために奨励したのが始まり。
「郡上のナー八幡 出てゆく時は(ア ソンレンセ) 雨も降らぬに 袖しぼる」

富山県 越中おわら節
越中八尾の盆踊唄。哀愁を帯びた独特の節回しに、北国の情感が漂う。
「うれしや気ままに オワラ 開く梅」

富山県 越中おわら節
越中八尾の盆踊唄。哀愁を帯びた独特の節回しに、北国の情感が漂う。
「うれしや気ままに オワラ 開く梅」

岩手県 南部牛追唄
牛での荷物運搬や放牧時に唄われた。
「田舎なれどもサアハエー 南部の国はヨー 西も東もサアハエー 金の山コーラサンサエー (ハラヨー バツバツバツバア)」

山形県 花笠踊
祝詞として全国的に古くから有名な一節が冒頭にある。大正期、工事の土曜日に船方節などを取り入れて完成。
「目出度々々々の若松様よ 枝も(チオイチオイ) 栄えて 葉も茂る (ハア ヤッショーマカシヨ)」

群馬県 郡上節
「郡上踊」「郡上音頭」ともいう盆踊唄。代々の藩主が民心融和のために奨励したのが始まり。
「郡上のナー八幡 出てゆく時は(ア ソンレンセ) 雨も降らぬに 袖しぼる」

富山県 越中おわら節
越中八尾の盆踊唄。哀愁を帯びた独特の節回しに、北国の情感が漂う。
「うれしや気ままに オワラ 開く梅」

富山県 越中おわら節
越中八尾の盆踊唄。哀愁を帯びた独特の節回しに、北国の情感が漂う。
「うれしや気ままに オワラ 開く梅」

愛知県 岡崎五万石
矢作川の船頭の舟歌に始まるとされる。江戸の唄に人気が出て、花柳界に広がった。
「五万石でも岡崎様は(ア ヨイコノサンセー) お城の下まで船が着く(シヨウガイナ)」

三重県 桑名の殿様
座敷唄で、もとは伊勢神宮の遷宮に必要な木材を運ぶ際の「木通唄」。
「桑名の殿様 (ヤンレー ヤットコセー ヨイヤナ) 桑名の殿さん時雨で茶々漬 (ヨイトナ アーレハ アリヤリヤン ヨイトコ ヨイトコナー)」

神奈川 箱根駕籠昇唄
荷物運搬の唄が、箱根の街道筋で唄った。「箱根長持唄」とも。
「竹にナナリたや(ヤレヤレ) 箱根の竹に 諸国のナー 大名の 杖竹にナアエ (ハツチヨイ ハツチヨイ)」

神奈川 箱根駕籠昇唄
荷物運搬の唄が、箱根の街道筋で唄った。「箱根長持唄」とも。
「竹にナナリたや(ヤレヤレ) 箱根の竹に 諸国のナー 大名の 杖竹にナアエ (ハツチヨイ ハツチヨイ)」

三重県 桑名の殿様
座敷唄で、もとは伊勢神宮の遷宮に必要な木材を運ぶ際の「木通唄」。
「桑名の殿様 (ヤンレー ヤットコセー ヨイヤナ) 桑名の殿さん時雨で茶々漬 (ヨイトナ アーレハ アリヤリヤン ヨイトコ ヨイトコナー)」

三重県 桑名の殿様
座敷唄で、もとは伊勢神宮の遷宮に必要な木材を運ぶ際の「木通唄」。
「桑名の殿様 (ヤンレー ヤットコセー ヨイヤナ) 桑名の殿さん時雨で茶々漬 (ヨイトナ アーレハ アリヤリヤン ヨイトコ ヨイトコナー)」

三重県 桑名の殿様
座敷唄で、もとは伊勢神宮の遷宮に必要な木材を運ぶ際の「木通唄」。
「桑名の殿様 (ヤンレー ヤットコセー ヨイヤナ) 桑名の殿さん時雨で茶々漬 (ヨイトナ アーレハ アリヤリヤン ヨイトコ ヨイトコナー)」

三重県 桑名の殿様
座敷唄で、もとは伊勢神宮の遷宮に必要な木材を運ぶ際の「木通唄」。
「桑名の殿様 (ヤンレー ヤットコセー ヨイヤナ) 桑名の殿さん時雨で茶々漬 (ヨイトナ アーレハ アリヤリヤン ヨイトコ ヨイトコナー)」

三重県 桑名の殿様
座敷唄で、もとは伊勢神宮の遷宮に必要な木材を運ぶ際の「木通唄」。
「桑名の殿様 (ヤンレー ヤットコセー ヨイヤナ) 桑名の殿さん時雨で茶々漬 (ヨイトナ アーレハ アリヤリヤン ヨイトコ ヨイトコナー)」

江戸ことば

語尾のアイ・オイをエーと発音する。特に職人らの言葉を「べらんめい言葉」という。

例：東→シガシ 質屋→ヒチヤ
～ない→～ねえ うまい→うめえ
大根→デーコン

土地の唄と言葉

各地には、労働や神事・祭の際にみんなで呼吸を合わせるための、様々な唄が伝わっています。人々の暮らしから生まれた唄には、郷土の特色が盛り込まれています。街道が整った江戸時代には、これら各地の唄が口伝えで緩やかに広がりました。全国各地の国言葉や5万8千曲ほどある「民謡」の中から、ピックアップして紹介します。

名古屋弁

上町言葉(名古屋市広小路通以北城下町で使用)は、語尾に「なも」「えも」がつくほか、「さま」をつけたりする。下町言葉では語尾に「がね、がや」を用いる。武家言葉も入る。

例：お坊さん→おっさま
失礼します→ご無礼します

